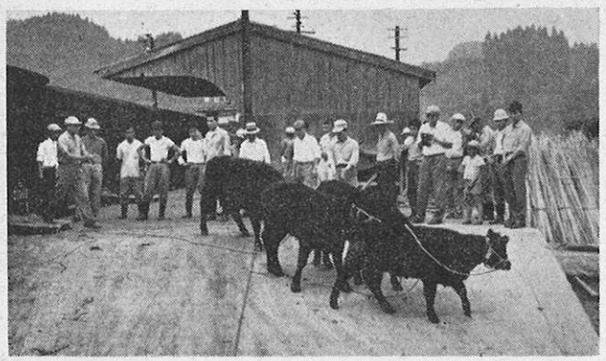
を受けたので、私の責任において解剖を実行したが、果して予診のとおり、胃袋の中に羊毛麻袋を縫う十センチ程の大針を発見した。そのときは悲しみも忘れ、天にも昇る思いがした。

胸腹腔内の著変の状況は、とうてい助かる見込みのない不可抗力の疾患であつたからである。

解剖に立ち会つた船長や船医も、ともに安心されたことは云うまでもない。私はねんごろにこの牛の冥福を祈りながら、海中に投じて水葬したのである。



ガス抜いて牛助かる

ところが、明日は日本に着くと云う前夜、またしても一頭をあやふく死なせるところであつた。

毎夜八時に給水していたのを、水夫が「今夜は七時に水を飲ませたい」と云うので「そうしましよう」と甲板に下りたとたんのできごとだから不思議なものである。

鼓張症で間一髪というころ、ガスを抜いて適切な施療をしたので助けることができたが、敷草に利用した醗酵牧草を食べたのが原因であつた。

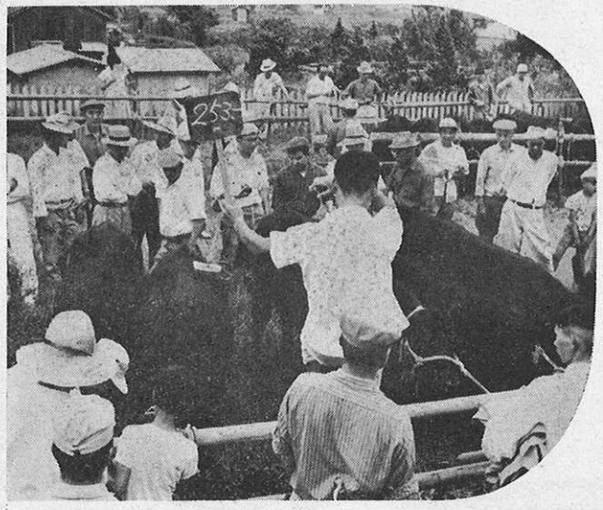
その夜は寝ずに見廻つたが、「人の言うことはすなおに聞くべきだ」とつくづく思つた。

「放射能汚染の疑いあり……」

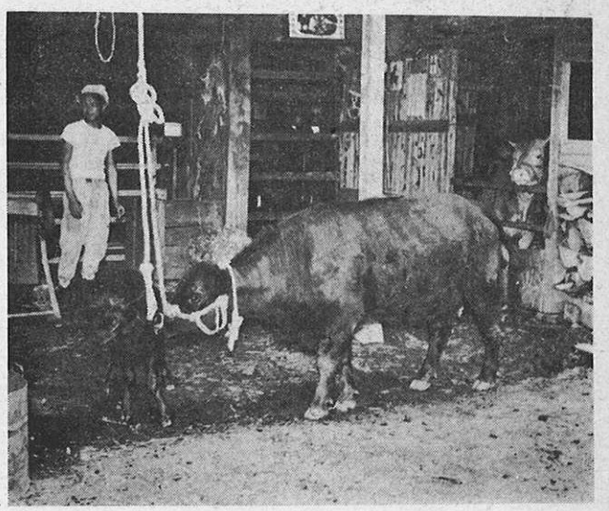
話は前後するが、五月十七日船内のNHK海外放送で、私達の輸送する肉牛については、米国が行なつた核実験放射能汚染の疑いありとして、神戸入港と同時に検査する旨を聞いた。それからは少しのスコールにも濡らさぬよう、草も牛舎内で与え、細心の注意を払つてきた。

入港と同時に各新聞の記者や検疫所員が上船して牛について精密な検査を行なつたが、まるで自分が受けているような気がした。

幸い異状がなかつたのでホッとした。二十八日神戸へ全部の牛を揚陸したときの嬉しさは、何にもたとえられなかつた。



(上) やつと小国駅に着きました。
(中) 入札で希望農家へ……



農家では同郷出身の乳牛ジャージー君と一しよになりました。

× ×

一カ月間起居をともにした九十一頭のアンガス牛は、検疫を終り六月十七、十八日つつがなく小国へ到着。今は、各農家や、見事に草地化された小国町の三共牧場（三十六頁参照）で順調に育つている。

こうしてはるばる輸入してきた牛が、本県畜産のいしずえとして、今後大いに貢献してくれることを祈つてやまない。

（畜産課）

イエバエ

撲滅始末記

昨年は県下で小児マヒが大流行しましたが、これはイエバエやゴキブリ等が病原菌をまきちらすのがおもな原因とみられていました。

そこで、県は市町村と一体となつて、県下一斉にイエバエ撲滅の運動を起しました。すでに、殆んど全部の市町村が第一回の一斉撒布を完了。九月には二回目の撒布が予定されています。

なかには農繁期や水害等のために、撒布を延期しているところもあるようですが、できるだけ早く完了されるよう望まれています。ではここで、各地できいた話を二つ三つ……

子供のケンカ

つい最近のこと、三角町戸馳小学校の生徒が、校庭ではげしく言い争いをして、今にもケンカになりそうな事態になつた。

早速先生が発見し、言い争いの原因をきいてみると、部落にハエが「居る」「居ない」の論争が発端だということだつた。

田井之浦部落の子供は「オレ達の村にはハエが一匹もおらん」というのに対して、他の子供は「そんなことがあるもんか。一軒に十匹位いは、かならず居るはずだ」と強硬に反論。

先生は、これは面白い問題だと、論より証拠、直ちに現地調査をしたところ、田井之浦部落は県の実験地区としてダイヤジノン五%乳剤を撒布したので、実際一匹のハエも居ないことが判明した。先生も驚き、軍配を田井之浦の生徒の方に上げ論争も無事ケリがついた。

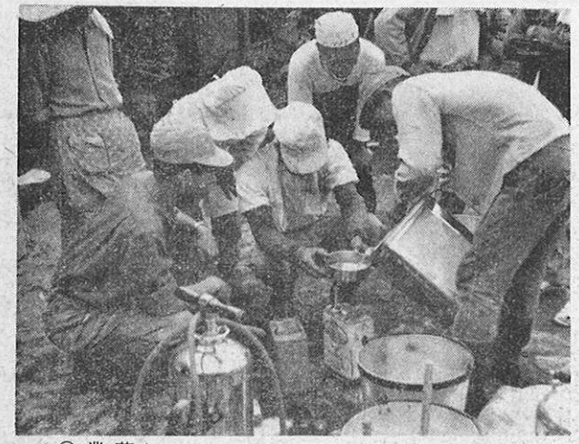
その話しを聞いたPTAの幹部や婦人会等は保健所から講師を招いて話しを聞き、近く自己負担（一戸当り百三十円程度）でもして薬剤撒布をしようということになりました。

ノミも全滅

ある実験地区の子供は、去年までは、朝食を済ませたら必らず肌着をかえて学校に出かけるという習慣がありました。

これは夜ノミの襲来の結果、肌着全体にその血液が点々とつくので、そのまゝ登校するというつも笑われていたので、いつからか肌着交換の習慣となつていたものです。

今回の薬剤撒布でその薬剤の⅓程度が畳の上に落下してノミが全滅したので、登校前の肌着交換の必要がなくなつたそうです。ノミ君もとんだトバツチリを受けたわけです。



薬剤撒布は共同作業で……
（モデル地区にて）

わがアイデア

これはある人のはなし……県が推進している「イエバエのいない運動」は非常に良いことではあるが、その薬剤の効果はどうなのか？個人では家の天井にどんな方法で薬剤撒布をしたらいゝのか等、一寸考えさせられた。

ハタと浮んだアイデアが、電気掃除器を利用して天井に吹き付けてはと考えつき、早速実行して見ると見事に吹きつけることができたばかりか、薬の効果も非常に良く、現在では家の中で